

平成 18 年度千葉県立中央博物館自然誌シンポジウムの記録

甲虫相から見る千葉県

一里山と海の県、茨城・千葉・神奈川の比較から

日本鞘翅学会との共催で 2006 年 11 月 18 日 (土), 19 日 (日) の両日にわたり中央博物館講堂において開催され, 参加者は 179 名であった。このシンポジウムは, 大野正男先生による特別講演とシンポジウムの 2 本立てで行われ, 茨城県と神奈川県との甲虫相の比較から千葉県の生物相の特徴を明らかにしようとするものであった。なお, 本シンポジウムの講演要旨は日本鞘翅学会大 19 回大会講演要旨集に, さらに講演内容の詳細は千葉県昆虫談話会誌「房総の昆虫」No.38 に掲載されている。

プログラム

◎ 平成 18 年 11 月 18 日 (土)

公開特別講演 (14:15~15:15)

「分布図で見る房総の昆虫たち」

講師: 大野正男氏 (東洋大学名誉教授)

膨大な文献記録に基づいて作成された分布図から, 房総半島にとどまらず, 様々な生物の分布・生物地理を論じていただいた。

◎ 平成 18 年 11 月 19 日 (日)

公開シンポジウム

「甲虫相から見る千葉県 - 一里山と海の県: 茨城・千葉・神奈川の比較から -」(14:00~16:00)

- | | |
|---|-------|
| S-1 甲虫から見た千葉県 - 一里山と海の県: 茨城・千葉・神奈川各県の比較から - | 山崎 秀雄 |
| S-2 千葉県のカミキリ相について | 伊藤 敏仁 |
| S-3 神奈川県の甲虫相とコガネムシ科, カミキリムシ科 | 平野 幸彦 |
| S-4 茨城県に棲息する甲虫類とその特徴 | 大桃 定洋 |

講演要旨

S-1 甲虫から見た千葉県

一里山と海の県: 茨城・千葉・神奈川各県の比較から -
山崎 秀雄 (千葉県市川市)

通称, 甲虫類は節足動物門, 昆虫綱, コウチュウ目に属す。昆虫類のなかでは分化発展をとげた仲間であり, 各種環境に生息している。また, 種類数も多く日本産は約 1 万種ともなる。体長は日本産では 1 mm から, シロスジカミキリのように 50 mm を超える仲間まである。きれいな種や採集後の標本作製も簡単ことから, これらの研究者も多い。このようなことから, 各地域の甲虫相の解明が進みつつある。

今回, 千葉県立中央博物館で第 19 回日本鞘翅学会が開催されるので, それを記念して, 環境が比較的似た千葉県と茨城県, 神奈川県とのコウチュウ相を類似

指数を交え比較することとした。コウチュウ相解明の先進的な神奈川県に千葉県と茨城県も追いついてきた。しかし, コウチュウ相全般が 3 県とも比較できるほど, 同じレベルに達していない。そこで, 比較的差のないコガネムシ科とカミキリムシ科を比較することとした。

S-2 千葉県のカミキリ相について

伊藤 敏仁 (千葉県匝瑺市)

本県はブナ帯がなく神奈川・茨城県に比べてカミキリの種数は少ないが, アマミトラカミキリ, ハチジョウウスアヤカミキリ, トサヒメハナカミキリ, クロサワヒメコバネカミキリなど近県に記録がない種が分布している。また, 房総丘陵にはオオトラカミキリが生息しており, 場所によっては比較的密度が高い。筆者らは 10 数年前からオオトラカミキリの飼育に取り組み, 自然状態ではモミを食樹としている本種をアカ

マツやクロマツで飼育し、体長 30mm を超える大型個体を羽脱させるに至っている。

房総半島南部には頭部まで橙黄色のヘリグロリングカミキリがいたり、また最近になってシラホシキクスイカミキリやカタキハナカミキリが発見されるなど、本県のカミキリの魅力は尽きない。

S-3 神奈川県のア虫相とコガネムシ科、カミキリムシ科

平野 幸彦（神奈川県小田原市）

神奈川県の甲虫は 2004 年に神奈川昆虫誌が完成し、種数では 4000 種を越え、かなり充実してきたが、まだ北部の藤野町や三浦半島などの調査不十分な地域が残っている。しかし、完璧とはいえないものの、過去のデータからかなりの精度で、甲虫相を論ずる基礎が出来上がったといえよう。今後、種々の分析を試みたいと思っているが、ここではごく一般的な甲虫相の概要を述べてみたい。

神奈川県は日本のほぼ中央に位置しているので、本州を代表する甲虫相であろう。箱根山塊と丹沢山塊があり、それに連なる低山と平地になって、北部の藤野町へ、一方は三浦半島、川崎・横浜の東部平野となり、南は相模湾となる。高い山はなく、最高峰の蛭ヶ岳が 1625 m である。主稜部の植生環境はオオモミジガサ？ブナ群集で、シラビソ帯はないので、高地性の種は見られない。さらに富士・箱根火山帯の影響があって、高桑正敏が提唱する伊豆・箱根欠如要素などにより分布していない種もある。しかし、フォッサ・マグマ要素といわれる種の存在も認められる。箱根と丹沢は顕著な違いが見られ、種数的には圧倒的に丹沢のみに生息する種が多い。また、火山帯の影響か、県東部に寄るほど種が増加する現象が見られる。ヨコハマナガゴミムシを代表する固有種や準固有種もいくつか見られる。

神奈川県の人口は大阪を抜いて 2 番目となった。このことはいかに都市化が進んでいるかを物語っており、平地産の種が絶滅に追い込まれている。特に水辺環境は最悪で、湿地や沼地は少なくなり、ゲンゴロウやミズスマシの減少は著しい。海岸も荒廃が進み、砂地が砂利化して、海浜性の甲虫が採れなくなっている。一言でいえば、神奈川県は絶滅・危惧種の先進県で、県レッドデータ種も他県に比較して多い。

一方、移入種が増えており、北上する種の始まりは小田原地方から、外来種は空港、港が近い川崎・横浜地方から発見されることが多い。土が付いた園芸植物、樹木や芝などの移動で、国内外の外来種が突然発生する可能性も大きく、温暖化と相まって定着することが予想される。

神奈川県の甲虫類はさらに精査すると将来、5000 種を越えることが想定される。もっとも追加種数が多

いのはハネカクシ科と思われ、次いで、ゾウムシ科である。科毎に検討した一覧をお見せしたい。また、他県との比較を試みたいが、ここではコガネムシ科とカミキリムシ科の神奈川県の現状を述べる。

S-4 茨城県に棲息する甲虫類とその特徴

大桃 定洋（茨城県阿見町）

“茨城県に棲息する甲虫類が何種であるか？”

県内の甲虫に興味を持つ仲間にとっては大きな課題であり、1980 年に 43 科 501 種の目録がまとめられて以来、多くの努力が払われてきた。そして、四半世紀を経た昨年（2005 年）にようやく 112 科 2583 種を記録し、現在は 114 科 2625 種に至り、当面の目標であった 3000 種の目録もあと一歩となってきた。ただし、充実した調査を展開して 4000 種を遙かに越えている神奈川県や福井県には遠く及ばない。

茨城県の甲虫類はオサムシ科（337 種）、ハネカクシ科（196 種）、カミキリムシ科（232 種）、ハムシ科（211 種）、ゾウムシ科（212 種）の 5 科で全体の 45.3 % を占めている。この傾向は近県の調査報告書などでも同様であるが、茨城県においてはハネカクシ科、コメツキムシ科、ケシキスイ科、ゴミムシダマシ科、ハムシ科、ゾウムシ科などの充実度が劣っている。まだまだ不十分な茨城県産甲虫目録ではあるが、それでも 1）日本における分布の北限となる種が少なからず含まれる、2）貴重な湿地性甲虫類が少なからず棲息している、3）全国的に非常に珍しい種がポツポツと含まれる、などの特徴を抽出することができる。

さらに詳しく茨城県産甲虫類を眺めてみると、例えば、人気の高いカミキリムシ科は亜科（さらに属）レベルでハナカミキリ亜科、特にヒメハナカミキリ属種の貧弱が目立つ。また、県北の八溝山や花園山地からのみ記録されている種（奥州山地系種群）が 36 種を数え、一方で、海進期に関東平野を飛び越えて県央の中山間地域に進入したと思われる種（西南暖地系種群）も 15～20 種を数える。茨城県産種 232 種からこれらの種群を差し引いた 170?180 種が海退期以降に関東丘陵地から茨城県の平野・丘陵地域へ分布を拡大してきた汎関東平地（里山）種群となり、これらの総計が将来的な茨城県産種の最大値 235?240 種であろうと思われる。他方、コガネムシ科ではマグソコガネ亜科（26 種）、コフキコガネ亜科（29 種）およびスジコガネ亜科（26 種）の 3 亜科で全体（119 種）の 68% を占めているが、近県の目録などからマグソコガネ亜科とコフキコガネ亜科の種数の不充実が目立っている。その他、タマムシ科、オオキノコムシ科、ナガクチキムシ科のどの人気の高い仲間の茨城県における分布状況を紹介するとともに、県産甲虫類の全体を見渡した特徴を紹介したい。